土曜日であつたからして、自分の通された二階の畫室には、二三の人々が、靜物をやつておられた。始めて伺つた事とて、先生は定めし嚴格な、かたくるしい人とはかり思つて居たのに、案外にも先生は、大變ひらけた面白ろい方でした。種々話の末に、先生は「君はあのすごい煙の出ている繪や、虎でも出そうな栗林の、すごい繪はどうしましたか」と問はれた。自分は皆殆ど燒いてしまいましたと答えたので、先生はあゝいふ繪は紀念になるから、取つて置くものです」といつて非常におしまれた。

栗林のすごい繪といへば、自分が研究所へ入學して間もない繪なのだが、先生のよく記憶しておられるのには、自分は且つ驚き且つ喜んだ。それは先生とあまり話もしたことのない自分の繪をかばかりに、先生は注意していて下さつたのかと思ふと、嬉しくて〳〵、先生の親切に感泣しないわけにはいかなかつた。

○先生は又非常によく、細かい處に迄で氣のつく方であつた。AYT君等が、先生の遺書をかたづけに、行かれて歸つてからの話に、先生の遺書が、畫室に山をなしていた中に、新聞や雜誌の切りぬきが、亦少なからずあつたとの事である。察するに、先生はその等のものを、先生自身の爲めに、切り取つておかれたといふよりも、むしろ我々後進を導く爲めに、切り取つて置かれた物の方が、多數をしめている樣に思ふ。實際先生は、一寸した事でも、すぐそれを教訓として、わかりやすく、我々におさとし下さつた。

教へるといつても。先生は決して(ごく初學の人は別として)形にはまつたお教へようは、なさらなかつた。其の人人によつて、よく特色といふ事に氣をつけられた。實に先生の如き好教育家を失つたのは、かへすがへすも殘念である。

○先生の墓標は雜司ヶ谷の、共同墓地に立つている。時々思ひ出しては、我々研究生も墓參に出かける。中には形式一遍に、皆と一所に行く輩もないではない。然し中には、又自分の家の墓さへも、參詣した事のない連中も、先生のお墓へは出かける。これ一つには、墓地が研究所の近くにあるといふのではないが、寫生に行くに便利な地點にあるせいかもしれぬが、兎に角先生の德が、しからしむる處だと思ふ。(二月四日)

田舍二青年の會話

岩代　きいち生

二青年、黃ばめる芝生に寢ころびて語る。……。

A「近頃どうです。やつてゐますか?」

B「いや田舍にくすぶつてゐると、矢張り駄目だ。やる氣が自然失せるね。周圍からはいろんな冷笑をあびせかけられるしね。西洋畫つて、なんだ、いやにこつてりしたきたないものだ、なんて野暮をいふものが多い。漱石の「草秋」にある坊さんのやうに、襖に西洋畫をかいて貰へまいか、などゝいふ人間ばかり多いんだ。

A「刺戟の多い都でなくちゃ。か。まあ第一田舍にゐると、新しい畫を見る事が出來んからね。之が吾等の大なる不幸といふものだ。」

B「見る事は七分といふぢやないか。ね。」

A「それはさうと、此間ね相田寅彦さんに會つて來たよ。ずうつと足尾銅山の方から、寫生して來られたのさ。それは、すばらしいものがあつたよ。から赤い大きな岩があつてね、それが淸い溪流に映つてゐるさま、目醒むるやうに出來てゐたつけ。その岩の上に、裸體の女が腰かけてゐるのさ。それから綠こき森林の畫もあつた。未成品だつたが、黃ろい三日月が深山を照してゐる凄いやうなものもあつた。大變益になつた。」

B「さうか僕も是非行つてみたいものだ。」

A「是非行つてみたまへ。油繪も二三あつた。君美校へ這入る積りなら、一年位東京で木炭畫を稽古しなくちや、餘程面倒なさうだぜ。」

研究所で二年もやつた奴が、飛び込むんだそうだから。研究所へはへるにしても、髮の毛を長く延してへたな熱をいふてゐる奴なんかに交つては、駄目だつて相田さんは云つたよ。ほんとうに、畫を以て生きんとするなら、上京して、眞面目に研究した方がいゝと言はれた。僕は肝に銘して來たんだ。」

B「矢つ張り上京しなくちやいかんのだね。僕の親父は許してゐるのだから、上京するかなあ。中學を卒へたはいゝが、から定らずに家にゐるのも苦痛だからね。どうせやらうと決心したんたから。上京してそして大下先生が古來成功した偉人は、天才に加ふるに堅い意志があつたとか言はれたがこれだね。この堅固なる意志を以てやるのだ。」

A「撓まず屈せず、やつてゐるうちに、いろんな發見もするんだ。やたらに先を急いぢや駄目だ。上京したら、しつかりやり給へ。僕は家がゆるさんからね。行けんけれど。」

B「君今年の春、若松に夢二氏が來たつたさうだが、會つたか。」

A「知らん。」

B「さうか。あの人も時勢が生んだ寵兒だが、ポツとついた。マツチの光りのやうなものだと思ふが。」

A「あ、あんなあそび畫は、眞似たくない。永くつゞかないさ。」

B「美術家には苦鬪して大家になつた方が多いぢやないか。不折氏、三宅氏皆さうだ。」

A「さうだね。苦まんぢやうそだ。苦まんぢやうそだ。」

B「お互に努力しやう。さうだ。さうだ。」

（終り）

池畔の森に就て

水野以又

場所は上州赤城山頂、血の池の畔りてある、偶作であるから、別段感想として書く程の事もないが、短時日の旅行の事であるから、緩くりとしても居られず、登山の三日目、見付け出した處で、此一ヶ所に全力を注ぐ可く、決心した、氣に入つたコン